

1940年代初頭のアメリカにおける「単元学習」の理念

小久保 美子

The Idea of Unit Approach in United States in the Early 1940's

Yoshiko KOKUBO

「単元学習」は、戦後初期の占領下の教育改革期に、アメリカから移入され盛んに喧伝された学習のあり方である。国語教育においても、『昭和二十二年度（試案）学習指導要領国語科編』の巻末に、「参考一」として単元の展開例が付された。しかし、研究者らによって我が国に紹介された単元の考え方は、必ずしもアメリカの単元学習の考え方を正当に踏まえたものではなかった。

そこで本稿では、単元学習について述べられた1940年代初頭のアメリカの代表的な文献を基に、単元の定義、単元の分類、単元の基準、単元学習の手順、日課における位置づけ等の観点から、単元学習の本質的な考え方を明らかにした。

1. 問題の所在

戦後期の占領下にアメリカから持ち込まれた「単元学習」は、新教育の教育を実現する方法として盛んに論議された。しかしそれらの論議は、「単元学習」がアメリカで、理論的にそして実践的にどのように生成し、発展し、収束していったのかを踏まえることのない、短兵急な議論であった。

佐藤学は、戦後新教育の時代におけるアメリカの単元学習の展開に関するわが国の紹介と導入について、以下の三つの問題点を指摘している¹。

第一に、当時の研究は、性急な普及の要請のもとで、代表的な理論と方式の紹介に傾斜したため、広範な裾野を持つ単元学習の具体的な事実と多様な経験を対象化して検討する視点が希薄であった点である。……

第二の問題は、それらの紹介と研究が、当時のアメリカの「生活適応教育」の理論の影響のもとで展開されたために、「経験単元」を中心とする紹介と研究に傾斜し、「教材」と「経験」の両者を相互に関係づける単元学習の様式を軽視する結果をまねいたことである。さまざまな様式を持つ単元を「教材単元」と「経験単元」に二分して類型化し、「経験単元」を優位におく通念は、この時期の研究と普及の所産であった。そして、「経験単元」に単元学習一般を従属させる通念は、活動主義と経験主義の弊害をもたらし、その後、教育内容の現代化の時期に、「経験単元」とともに単

元学習一般までも衰退させる要因の一つとなった。……

第三の問題は、単元学習の開発、改造、再編の複合的な展開過程が、平板な枠組みでしか理解されてこなかった問題である。従来の「伝統的」対「進歩的」、「教材中心」(学問中心)対「子ども中心」(経験中心)という枠組みでは、多様な原理を含む単元学習の複合的な展開過程を解明することは不可能である。……(下線引用者)

本稿では、佐藤の問題意識に立脚しながら、アメリカの「単元学習」に関する当時の文献を検討することを通して、「単元学習」についてどのように考えられていたのかを明らかにしていきたい。

2. 学習指導のあり方としての“Unit of Work”

「単元学習」は、アメリカのカリキュラム改革に伴って生まれてきた学習指導のあり方である。原語は、1940年代における“Unit of Work”である。しかし、Unit of Workは、わが国では「作業単元」と訳され、経験単元とほぼ同一の概念として用いられた。そしてそれは、佐藤が第二の問題として指摘するように、「教材単元」と対置されるものとして受けとめられる傾向にあった。

アメリカの当時の代表的な教育辞典、*Encyclopedia of Modern Education*によれば、Unit of Workは、以下のように、Lesson Planと対照をなす語として扱われている²。(邦訳は小久保による。以下、断りない限り同様)

Unit of Work

継続期間	—数時間、数日、数週間続く
誰に向けて？	—通例は、全体的な使用に向けて計画される
規模	—通例は、豊かな言説である
統一性	—統一の機会を有する
自然性	—完全な生活経験をもつことができる

Lesson Plan

継続期間	—通例は、一時間扱い
誰に向けて？	—個人的な使用に向けて書かれる
規模	—通例は、短い概説である
統一性	—不意に中断する
自然性	—教材 (subject matter) のわずかな部分である

この対比からも明らかなように、Unit of Workは、「学習のあり方」に対する概念であり、単元学習の分類に属する「作業単元」の意に限定されるものではない。したがって、Unit of Workの考え方に基づいて帰納される「単元」(Units)には、「教材単元」も含まれることになる。同辞典では、便宜上、単元は二つに大別されるとし、それぞれについて解説を加えている³。それらをまとめると以下のようなになる。

(a) 教材単元(subject-matter units)

教材（学科—subject—，テーマ，生活の広い領域）単元は，教科書の章や話題に関して組織されたものを含む

- ；主要な一般的規則（generalization），原則，テーマに関して組織された単元
- ；空気や水，空，気候などのような環境の側面にて組織された単元

完全に一つの教科領域（one subject field）に基づいて引き出される教材単元もあれば，一教科以上の教科領域から引き出される教材単元もある。

(b) 統合的な経験単元（integrative experience units）

形式的ではなく，より生徒の直接的な興味や直接的な目的，あるいはそれらの組み合わせに基づいている。

経験単元の中には，主にあるいは完全に一つの教科領域から引き出されるものもあるが，多くの経験単元はいくつかの教科領域からの情報を含んでいる。複数の教科領域にまたがる単元は，一人の教師，あるいは二人かそれ以上の教師によって協同的に指導される。

ここで定義する教材単元における「教材」は，わが国のそのように教科書教材を意味するものではない。教材は，一般的規則や原則，テーマ，あるいは，空気や水などのような，主題や話題に関して集められる資料を指す用語としてとらえることができる。

教材単元か経験単元かは，単元が，ある主題や話題から引き出されるのか，あるいは，学習者の直接的な興味や目的から引き出されるのかによって区別される。「多くの経験単元は複数の教科領域からの情報を含む」と述べていることから，わが国のように，教科から離れた活動中心の経験単元とは趣を異にしているということがうかがえる。

単元の類型について，さらにくわしくみてみることにしよう。

“Unit of Work” について，概念を整理した文献の一つに，J. Murray LeeとDorris May Leeの著した*The Child and His Curriculum*⁴（以下，本書とする）がある。本書では，単元の類型として，レオナルドの分類⁵，キャズウェルとキャンベルの分類⁶を挙げている⁷。（以下，訳語は倉澤剛⁸に依ったが，下線の語は語意を考えて引用者が改めた。）

レオナルドの分類

- 伝統的教材单元 (Traditional subject-matter unit)
- 機能的教材单元 (Functional subject-matter unit)
- 可能的児童経験单元 (Possible child-experience unit)
- 直接的児童経験单元 (Immediate child-experience unit)

キャズウェルとキャンベルの分類

I. 教材单元 (Subject-Matter)

- A. 主題单元 (Topical unit)
- B. 概括单元 (Generalization unit)
- C. 環境や文化の重要な側面にもと^{ママ}づく单元
(Unit based on significant aspect of environment or culture)

II. 経験单元 (Experience)

- A. 興味を中心にもと^{ママ}づく单元 (Unit based on center of interest)
- B. 生徒の目的にもと^{ママ}づく单元 (Unit based on pupil purpose)
- C. 生徒の要求にもと^{ママ}づく单元 (Unit based on pupil need)

さらに本書では、以下の二つの観点に基づいて分類するのがより有益であるとしている⁹。

- (1) 一つの教材のまとまりから子どもの経験にわたる単元の範囲にもとづいて分類する。
(この分類は、学習経験について子どもが主役であるかどうかを識別するのに役立つ。)

- (2) 単元が組織される問題、あるいは問題群に基づいて分類する。

そして、(2) の優れた分類として、ハラップ¹⁰のものを挙げている。

Unit of Workの基礎に関する再分類試案

1. 完全な生活経験または状況 (situation)

- A. 真に迫った企画——病気の世話 (健康) ——コーラス (音楽)
- B. 仕事——道具を組み立てる (工芸) ——書類整理 (商業)
- C. ゲーム—— (体育)
- D. 個人的な行動——食べる習慣 (健康)

2. 社会的環境の側面

- A. ビジネスの様相——保険 (商業)

- B. 地理的単位——アラビア半島（地理）
- C. 社会的制度（institution）——家庭（社会科）
- D. 経済生活の方面（phase）——お金と信用（credit）（経済）
- 3. 自然環境の側面
 - A. 自然環境の様相——天候（理科）
- 4. 子どもの興味を中心
 - A. 子どものテーマ——船（社会科）
- 5. 規則（generalization）、テーマ、あるいは概念
 - A. 社会組織——人間と人間の世界（文学）
 - B. 社会方針（policy）——自然資源の利用（社会）
 - C. 歴史上——領土拡大（歴史）
 - D. 社会環境——共同生活（社会）
 - E. 物理上——地球の変化（理科）
 - F. 生物上——進化（理科）
- 6. 物事の重要な類（class）
 - A. 植物の世界で——果物、木（理科）
 - B. 動物の世界で——鳥（理科）
 - C. ビジネスの世界で——交渉の手段（商業）
 - D. 音楽で——歌（音楽）
 - E. 地理的環境で——熱帯、乾燥地帯（地理）
- 7. 技術的原理、慣習的な科目の側面
 - A. 科学的原理——地球引力（理科）
 - B. 芸術的原理——形（工芸）
 - C. 科学の方面（phase）——細胞と組織（理科）
 - D. 等級の段階と過程——十進法（算数）

しかし本書では、分類は、あくまでもどのように指導されてきたかというその方法によるのであって、こうした分類は、カリキュラム開発のためにはほとんど価値をもたないとしている。大事なものは、分類よりも資料と方法であるとし、実践に基づかない形の上での分類を戒めている。

倉澤は、このような単元の類型を紹介しながら、レオナルドやキャズウェル、キャンベル等は、「教材単元」から「経験単元」へと指向していると述べている。しかし、アメリカでこのように単元の分類を問題とするのは、学習の中心が「教材」から「子ども」へと実践的に移行することをめざしてのことであることに留意したい。つまり、子ども

の学習経験が、「教材」から出発するのか、「子ども」から出発するのかによって、「教材単元」か「経験単元」かが決まるのであって、これらの分類は、学習のあり方に関する指標にすぎないということである。

子どもの活動（経験）を豊富に組んだからといって、「経験単元」になるというわけではない。大事なのは、それらの活動（経験）が、子どもの興味や目的に根ざしているかどうかという点である。子どもにどのような経験をさせるかという視点から、眼前の子どもから目を離し社会の問題や自然の環境を見渡して子どもの前に活動（経験）を用意するという当時のわが国の単元構成のしかたでは、真の意味での「経験単元」になり得ない。このようなアメリカと我が国の日本の単元構成の視点の違いに基づき、「戦後のはい回る経験主義」と批判された当時の単元学習について省みる必要がある。

3. 単元の定義と基準

単元学習において大事なのは単元の出発が子どもの興味や目的に即することであることを、アメリカの文献に依拠しながら述べてきた。本項では、単元学習の定義、そして、単元学習の基準（criteria）についてアメリカではどのようにとらえられていたかについてみていくことにしたい。

本書では、単元について、次のように定義している。

単元は、目的（学習者にとって）であり、環境の重要な側面に関して洞察（insight）をし、また管理する力が増大するように、そして、学習者の社会化の機会が与えられるように展開される関連的な活動から成る¹¹。

単元を定義づけるキーワードやキープレーズは、「目的（purposeful）」「関連的な活動（related activities）」「洞察力（insight）」「増大した管理力（increased control）」「環境の重要な側面（significant aspect of the environment）」「社会化（socialization）」であると述べている¹²。

なおこの定義は、前掲の辞典においても全く同様に述べられていることから、この単元の定義は、教育界一般に認知されていたものと思われる。

また同辞典では、単元の基準（criteria）として以下の6点を挙げている¹³。

1. 単元は、今日根本的に重要であるとされる社会生活の側面への接触を含むべきである。
2. 単元は、学習領域の健全な繁栄に向けて、生徒が大事なデータ、関係、条件、問題等に親しむことができるように進展させられるべきである。
3. 単元は、生徒に、たくさんの経験や源泉資料への直接的な接触を豊富に与えるべきである。

4. 単元は、個人やグループがいろいろな形式の表現を通して、獲得した概念を明瞭にし豊かにする機会を豊富に与えるべきである。意味のある劇化、建設、絵を描くこと、スケッチをすること、色を塗ること、模型制作、野外劇、人形劇、音楽等の手段による創造的表現は、理解を獲得する重要な部分である。
5. 単元は、生徒の心的活動を継続的に刺激すべきである。このことは、プログラムを認識し、熟考する中で、明らかにされるのがよい。それは、より高いレベルでの目的化、計画、実行、評価において明らかにされる。
6. 単元は、協同的な努力の雰囲気の中で、継続的に、目的、活動、成果を共有し合えるようにすべきである。

(下線引用者)

単元学習には、4. に挙げられたような多様な活動が盛り込まれることが多いが、これらの活動は、理解を促し、獲得した概念を明瞭にし豊かにするための手段であることに留意したい。すなわち、活動が自己目的化されてはいないということである。また、単元学習のねらいの一つは「社会化」であるが、そのために、6. で述べられているように、「協同的な雰囲気の中で、目的や活動、成果を共有し合うこと」が大事な単元の基準となる。

4. 単元学習の手順と学習技能

前項で述べたように定義される単元の手順として、具体的にどのようなものが挙げられるだろうか。本書では次頁に掲げた、J.W.Wrightson¹⁴のものを紹介している。

本書では、「教える」ということに対する小学校教育の重要なことの一つは、効果的な学習習慣であると述べている¹⁵。そしてそのような学習習慣の指導は、多様な本を読むようになる高学年になるのを待ってからではなく、入学したその時点（幼稚園でさえも）からなされるべきであるとしている。ここで言う学習習慣とは、次の7つである¹⁶。

- (1) 目的の認識
- (2) 問題の分析
- (3) 個人的な、または協同での解決手段の計画
- (4) 資料や考えを判断すること
- (5) 決定した計画に基づいて遂行すること
- (6) 学習の効果的な方法を実践すること
- (7) 解決の主體的な評価

単元学習・プロジェクトを進展させる際の主な手順

興味の 刺激や確認	目的,活動, 方法の公式化	データの 調査と収集	データの統合と 関連づけ	活動の頂点	結果の評価
集団の企画 に向けて確定 され選択され るところの教室 や社会環境の 刺激剤 刺激の源泉: 1. 本 2. 会話 3. <u>話し合い</u> 4. 遠足 5. 展示 6. <u>雑誌</u> 7. 映画 8. <u>新聞</u> 9. 絵 10. <u>物語</u> 11. <u>トーク</u> 12. 旅行,他	生徒—教師 以下の点に基 づいて計画す る 示唆する: 1. 問題 2. 質問 公式化する: 3. 目的 4. 活動 5. 資料 6. 方法 試験的に組織 する: 6. 委員会 7. 報告,他	以下のよう な事実を含む: 1. <u>インタビュー</u> 2. <u>講義</u> 3. <u>図書館</u> (家庭学習) a. <u>報告書</u> レポート等 b. <u>百科事典</u> 3. <u>雑誌</u> 4. <u>地図</u> ,地球 儀,他 5. 映画 6. 博物館 7. <u>新聞</u> 8. 絵 10. <u>ラジオ</u> 11. <u>関連文献</u> 12. <u>スライド</u> 13. 店,工場他	以下のよう な教科で集め られたデータ の一元化と組 織化: 1. 算数 2. 劇化 3. 美術 4. 保健体育 5. 工芸 6. 言語 a. 口頭 b. 文字 7. 音楽 8. 読み 9. 理科 10. 社会科 a. 歴史 b. 地理	創造的表現 を通して、発見 したことや一 般化したことを 共有しあう: 1. 集会 2. <u>創造的な 物語や詩</u> 3. <u>劇化</u> a. 劇 b. 野外劇 4. 絵を描くこ とや色塗り a. 壁画 b. <u>ポート フォリオ</u> 5. <u>ノートブック</u> 6. <u>レポート</u> a. グループ b. 個人 7. <u>スクラップ ブック</u> 8. <u>物語</u> 9. <u>トーク</u>	1. 知的要素 a. 事実の想 起や認識,読 みの算数,言 語,理科,芸術 その他のスキ ル, b. 問題解決 のための,入 手,組織,解釈, 事実の適用 の能力とスキ ル 2. 動的な要素: 態度,動機,意 見,鑑賞,個人 的,社会的調 整,他 3. 遂行要素: 率先,批評,責 任,信頼性,勤 勉さのような 個人的—社 会的な質に おける行動, 行為,遂行

(下線は,言語経験に相当する部分に引用者が伏した。)

また,単元学習の学習過程において習得される学習技能(study-skill)を教師は無視してはならないとして,以下の9つの学習技能を挙げている¹⁷⁾。

1. 正確な読みの習慣

2. いくつかの資料の型(地図,絵,テキスト,他)からデータを探し,問題解決にそれらを使う能力

(6学年より前に,情報を得るために地図や絵を速やかに使う際には,特別の訓

練が必要である。)

3. 人とその人の当然の環境との関係 (relationships between man and his natural environment) を説明するのに、手近なデータの適切性を値踏みする能力
4. グラフィックな情報の絵を読み取る能力
5. 地図や地球儀からいくつかの型の情報を把握する能力
6. グラフや図表を解釈する能力
7. テキストに著述されたものを地図に表されたものや絵と比べる習慣
8. 地理に対する多くの専門用語についての知識
9. ページや図表を前後参照させて使う能力

以上、単元学習の手順、学習習慣、学習技能をみてきたが、これらの中には、言語技術に関するものが多々含まれている。単元学習が言語経験と手を結ばずには進展しえないというのは動かし難い実践的事実である。言語の教育を主体的に司る国語の教師は、そのことを念頭に踏まえ、国語の学習指導の展開の場と方法を見いだしていかなければならない。

最後に、単元学習がどのように日課に組み入れられていたのかをみておきたい¹⁸。

5. 日課例

日課A：教室が一つしかない地方の学校¹⁹

- 9:00……社会科
- 10:30……休憩
- 10:45……国語 (language-arts)
- 11:40……美術
- 12:00……お昼
- 1:00……読み (reading)
- 2:30……休憩
- 2:45……算数
- 3:40……理科
- 4:00……下校

※学年別の指導というより子どもの必要に応じたグループ指導で用いられる。

研究紀要 第29号

日課B：5学年²⁰

時 間	分		教 科
	週	日	
9:00-12:00	25	5	出席とお知らせ
	75	15	健康観察
	<u>400</u>	<u>80</u>	<u>国 語:</u>
			読みと文学
			図書室の時間
			綴りと習字
	200	40	算数と銀行業
	100	20	体 育
	<u>800</u>	<u>160</u>	
	100	20	休 憩
12:00-1:00 1:00- 3:30	<u>900</u>	<u>180</u>	総 計
			お 昼
	25	5	出席とお知らせ
	100	20	音 楽
	(575)	115	次のような活動の単元
	150		<u>作文と口頭国語</u>
	50		市民とサービス
	200		社会科
	75		理科
	100		技能教育
	<u>700</u>	<u>140</u>	
	50	10	休 憩
	<u>750</u>	<u>150</u>	総 計

(下線引用者)

日課C：中学年²¹

9:00……私的な挨拶，当番，考えの交流，音楽，おもしろい出来事の報告（教師には子どもを観察する機会を与え，子どもには最もおもしろい事柄を表現する機会を与える）

9:15……社会科と自然の学習

子どもたちの企画の進捗にしたがって，委員会や個々人の私的な報告。仕事の評価。一日の仕事の計画と話し合い。委員会への指名，図書室

の本や友達が持ってきた資料のような新しい資料が届いたことへの留意、目下の教科に関する報告版上の注意事項。建設の作業、芸術、計画にそったグループや個人の調査活動。時間のおしまいに与えられるグループで共有し合うための口頭や資料の報告。社会科や自然の学習から切り離すことのできない言語、芸術、読書。

10:30……健康的な生活

健康と体育指導、自由遊び。栄養のプログラムとそれを必要とする子どものための時間。

11:10……国語 (language arts)

口頭および作文表現、綴りと手書きのスキルと書くことや劇を通してこれらのスキル使用の実践、人形劇、物語や詩を書く、学校新聞に対するレポート、社会科に対するレポートの準備。

12:00……昼食、休憩、運動場での活動

1:00……算数的な企画

この時間の大部分は個人指導に充てられるべき。

基礎的な技能の樹立が目的とされるべき。

1:40……音楽のスキル、鑑賞、リズム

ハーモニカバンド、オーケストラ、合唱クラブ。クラブの打ち合わせ、講堂の使用、委員会の打ち合わせ。社会科に属する、特別に興味あることや詩作り、編み物、手芸や美術。図書室の時間（週に2日）。

2:10……休憩と娯楽

2:20……読書活動

能力別グループの読み。特に能力の劣った子どものための治療的作業。自由読書。国語や社会、自然の学習から生じた読書による調べ活動。

（下線引用者）

いずれの日課事例とも、国語（言語・読書）の時間が圧倒的な時間を占めている（下線部参照）。日課Aでは、一日当たり、言語—55分、読書—90分、日課Bでは、言語と読書—110分、日課Cでは、言語—50分、読書—70分以上（下校時刻を3:30と想定した場合）である。わが国の45分を1単位時間とした場合の2.5時間から3時間分に相当する。これが毎日続くので、週当たりの国語に充てる時間はかなりの量に上る。

これらの日課は、単元学習における経験・活動のいかに多くが言語に関わるものであるかを示している。と同時に、逆にまた、この時間の組み方から、アメリカの単元学習は言語経験を重要視しているということを窺い知ることができる。そしてそれは、畢竟

単元学習における国語の地位を自ずから明らかにしている。

6. 今後の課題

本稿では、1940年代初頭のアメリカにおける「単元学習」の理念について明らかにしてきた。そこでの単元学習は、教材単元と対置されるところの経験単元を意味するものではなかった。戦後期、わが国の国語教育界に単元学習を知らしめる原資料となった、ストリックランドの*How to Build a Unit of Work* (1946) (昭和23年の5月に行われた教員再教育講習会で、興水実が講義に用いた文献) は、本稿で検討した文献を基に著されたものである。しかし、短い講義の時間の中では、また当時のわが国における単元学習に関する混迷の状況下では、そして、図書館の設備もなく読書資料の乏しい貧弱な物理的環境の中にあっては、当時のアメリカの単元学習の理念を正しく理解し、それを具体的に実践することは望むべくもないことであった。

当時国語教育界で、アメリカの書物を渉猟し、実際にアメリカの実態をも見、そしてわが国の貧しい状況をも見合わせながら、国語における単元学習のあり方を説いたのは倉澤栄吉である。倉澤が、1940年代を中心としたアメリカの単元学習をどのように摂取し論を展開したのかについて明らかにし、戦後期における国語の単元学習論の歴史的な意義について検討することは、今後の課題としたい。

- 1 佐藤学 (1990) 『米国カリキュラム改造史研究』 東京大学出版会 pp.4-5.
 - 2 Harry N. Levin編 (1943) *Encyclopedia of Modern Education*, p. 860.
 - 3 *Ibid.*, pp. 860-861.
 - 4 J.Murray Lee & Dorris May Lee (1940) *The Child and His Curriculum*, D.Appleton-Century Company, Inc.
- 本書は、1940年に、W.H.Burtonの指導の下に著されたものである。1940年代のコース・オブ・スタディやカリキュラム及び単元学習に関する本などの参考文献となった。わが国にも当時アメリカから送られてきており、研究者等に用いられている。国語教育関係者では、平井昌夫、倉澤栄吉等が本書を取り上げている。
- 5 J. Paul. Leonald (1937) What is a Unit of Work? *Curriculum Journal*, Vol. 8, March, pp. 103-106. (引用者未見)
 - 6 Hollis L. Caswell and Doak S. Cambell (1935) , *Curriculum Development*, New York, American Book Co., p. 406. (引用者未見)
 - 7 注4に同じ p. 193.
 - 8 倉澤剛 (1950) 『単元論』 p. 38, pp. 99-100.

- 9 注4に同じ p. 193.
- 10 注4に同じ p. 193. Henry Harrap (1936), *A Survey of Courses of Study Published in Last Two Years*, *Curriculum Laboratory Bulletin No. 44*, (Nashville, Tenn., George Peabody College for Teachers). Also in *Journal of Educational Research*, Vol. 28, May, 1935. pp. 641-656. (引用者未見)
- 11 注4に同じ p. 192.
- 12 *Ibid.*, p. 192.
- 13 注2に同じ p. 861.
- 14 注4に同じ p. 204. J.W.Wrighesone, *Appraisal of Newer Elementary School Practices* (New York, Teachers College, Columbia University, 1938), p. 91 (引用者未見)
- 15 注4に同じ p. 221.
- 16 *Ibid.*, pp. 221-222.
- 17 *Ibid.*, p. 223.
- 18 *Ibid.*, pp. 229-231.
- 19 *Ibid.*, p. 229 Adapted from Wisconsin Department of Public Instruction, *Suggestions for Revising the Instructional Program of the Rural Elementary Schools of Wisconsin*, *Curriculum Bulletin*, Vol.2, No.2 (Madison, August, 1938). (引用者未見)
- 20 *Ibid.*, p. 229. Adapted from John A. Hockett and E. W. Jacobsen, *Modern Practices in the Elementary School* (Boston, Ginn and Co., 1938), pp. 106-107. (引用者未見)
- 21 *Ibid.*, p. 230. Adapted from *Teachers' Guide to Child Development in the Intermediate Grades*, compiled by the State Curriculum Comission (Sacramento, Calif., State Department of Education, 1936), pp. 34-35. (引用者未見)